

M250810 敗戦記念

「和解の食卓」 使徒 9：1－19

○導入

皆さん、おはようございます。今週の 8 月 15 日は敗戦記念日です。

100 年以上も前から韓国への侵略行為は繰り返されましたが、80 年前のこの日、日本は第二次世界大戦に敗れ、武器を置きました。けれど、戦争が終わっても、人の心の中の戦争がすぐに終わったわけではなく、すぐに平和が訪れたわけでもありません。

日本が戦った国々、特にかつて植民地として支配した朝鮮半島には、深い痛みと悲しみと憎しみが残っています。韓国・北朝鮮の方々の中には、家族を奪われ、言葉や名前を奪われ、信仰までも制限された人たちがいます。そして、日本国内にも戦争による傷は深く刻まれました。

私たちは、この日を単に「戦争が終わった日」として記念するのではなく、悲しい歴史を思い起こす日であると同時に、「主にある和解を選び取る日」、私たちが今、キリスト者としてどう生きるべきかを神の御前で問い直す日です。

では、どうしたら本当の和解が可能なのでしょうか？
時間が経てば自然にできるのでしょうか？忘れることでしょうか？
それとも、どちらかがすべてを我慢することでしょうか？

今日の聖書は、深い敵対関係にあった二人が同じ食卓に座る物語を通して、その答えを示しています。みことばから共に私たちのなすべきことを確かめていきましょう。

では、本日の聖書箇所を 1 節ずつ輪読しましょう。新約聖書、**使徒の働き 9：1－19**です。

○サウロとアナニア

この箇所はサウロの改心でとても有名な箇所です。ここに登場するサウロは、熱心なユダヤ教徒、パリサイ派という立法を守れない者は切り捨てるという、強烈なユダヤ主義の人でした。

彼はクリスチャンを異端とみなし、捕らえて牢に入れることを正義としていたクリスチャンを激しく弾圧し迫害する「敵」でした。そして、彼の正しさは人を殺し、教会を壊していきました。クリスチャンにとっては、サウロは恐怖の対象だったと思います。

そんな彼は迫害、主の弟子たちを脅迫して殺そうと意気込んでダマスコへ向かう途中、突然天からの光に打たれ、地に倒れます。そこで声を聞きます。「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」イエス様は、ご自分の弟子たちへの迫害を、ご自身への迫害と受け止められました。サウロが迫害していたのは、実はキリストご自身だったのです。

この時、イエス様から改めて自分が何の罪もない人を殺していた事実、イエス様を迫害していた事実を改めて突きつけられ、自分の罪深さに叩きのめされたサウロは、目が見えなくなり、3日間飲まず食わずで過ごしたと9節にあります。その間彼がしていたことは、11節を見ると「祈り」だったことがわかります。悔い改めの祈りだったと想像します。

そんなサウロを受け入れ、世話をすることになったのがアナニヤという弟子でした。アナニヤにとってサウロは恐ろしい存在です。心底怖くなったに違いありません。サウロがしてきたひどいことを多くの人たちから聞いていたからです。でも、主は言われます。

15節「わたしがサウロを選んだ」と。

アナニヤは恐ろしかったにもかかわらずイエス様に従い、サウロのもとに行き、こう呼びかけます。「**兄弟サウロ**」——敵ではなく、兄弟として。そして、敵と思っていたサウロを兄弟と呼び、手を置き、サウロの目が見えるようになり、聖霊に満たされるためにイエス様が自分を遣わしたことを伝えます。

その瞬間、サウロは、自分が迫害していたイエス・キリストが敵である自分を裁かず、赦し、キリストのために働くように自分を選んでくださったことを悟り、サウロの目から鱗が落ち、彼は見えるようになりました。そして、洗礼を受け、**食事をして力を得た**とあります。

この食事はキリストを覚える聖餐だったと思います。この食卓は、敵と敵が兄弟姉妹、同労者、神の家族と変わる場となり、サウロのキリストの証人としての新しい歩みの第一歩となっていたのです。

○韓国と日本

この物語は、私たちの日韓の歴史にも重なります。日本と韓国は、長い間、同じ信仰を持っていても「歴史の壁」に隔てられてきました。教会同士の交流も、正直に言えば簡単ではありませんでした。テバン教会でも特に年配の方々の中でコイノニアに反対する方が多くいたと聞きました。

しかし、イエス様はサウロとアナニアを和解させたように、国や歴史の壁を越えて人々を一つにするお方です。

日本も韓国に対してひどいという言葉では言い尽くせないことをしました。「七奪^{しちだつ}칠탈の罪」国王、主権、土地、国語、名前、国民、生命を奪い、皇后を虐殺し、36年間も植民地支配し、反抗する者を容赦なく多数殺害し、特に神の教会を迫害し、神社参拝を強要し、迫害し、多くの牧師や信徒を殺しました。そして、太平洋戦争中には、100万人以上といわれる人々を強制連行し、労務者に、兵士に、慰安婦にしました。そして、日本の侵略の結果として南北が分断されてしまいました。日本も韓国にとって、恐怖の対象であり、「敵」でした。

しかし、清野先生や竹腰長老が示された韓国の方々への真実な謝罪、コイノニアに参加するめぐみ教会の一人一人の歴史に誠実に向き合う姿勢、悔い改めに、テバン教会の一人一人が主にある赦しの手をアナニアのように差し伸べてくれ、主の和解の食卓に共に座り、食事を共にすることができ、その和解の食卓の交わりに今年は両教会の中高生も加えられました。

松浦さんのコイノニアの証にありましたが、この国境や国籍を越えた素晴らしい交わりに加えられた私たちには、キリスト者として果たすべき責任があります。それは、過去の歴史の意味を神様から教わり、今、そしてこれからの生き方を点検するということ。そして、キリストの和解の食卓を私たちを通して日本と韓国、世界に広げていくことです。

○和解は今も起こるーコロナ後のコイノニア再開

私はこの夏の日韓中高生コイノニアで、その小さな「和解の食卓」の広がりを見ました。コイノニアは長年続いてきた日韓の交わりですが、コロナによってその交わりは途絶え、今年9年ぶりに再開することができました。

私たちは、「みことばを食べよう」をテーマに、キャンプの中で御言葉を共に聞き、賛美をし、交わり、同じテーブルで食事をしました。blankがあったので、最初はお互いともぎこちなく、同じテーブルに座っても両教会ごとに分かれて座っていました。お互い少し遠慮があり、会話もたどたどしく、見ていて仲良くなれるかとても不安を感じたことを思い出します。

でも、一緒に遊び、賛美し、礼拝し、一緒にカレーを作り、洗足式で互いの足を洗ううちに、最後は手を繋ぎ一つとなって神様を賛美する子どもたちの姿が広がっていました。

80年前には敵同士だった国の若者たちが、キリストの名によって「兄弟」「姉妹」され、笑い合い、一緒に礼拝を献げ、寝食を共にしたこの光景は、まさに神の和解の奇跡であり、そこにいた先生たち皆が「主がここにおられる」と感じたことと思います。

戦争や歴史が作った溝は、人間の力では簡単に埋まりません。しかし、同じ主を見上げ、同じ食卓に座るとき、神様がその溝を埋めてくださいます。

2010年の中央サンデーという韓国紙に記載されたコイノニアについての清野先生の文章にはこのようにありました。『竹島問題で、反日感情が渦巻き、韓国内が熱かった時です。私は、約20名の信徒と一緒にテバン教会を訪問しました。教会の食堂で歓迎レセプションがあり、それぞれが自由に談笑していました。そこに外部の牧師がおられましたが、しばらくして、しみじみと言われました。「私は、今までの人生で、これだけ多くの日本人と韓国人が、このように穏やかに談笑しているのを見たことがない。これは奇跡です。」と。

この奇跡を今も主が私たちの間で行なってくださっています。

○和解の条件

サウロとアナニアの和解、そして日韓の中高生たちの再会に見る和解——
そこには共通する三つのポイントがあります。

1. 神の招きに応える

和解は、自分の感情や状況だけでは決められません。主が「行きなさい」と言われるとき、その声に従うことが第一歩です。ルカ14章の大宴会のたとえでは、神様は全ての人を食卓に招かれています。でも、全員がその招きに応じてはいません。応じるかどうかは私たち次第です。

2. 共に分かち合う

使徒の働き2章では、初代教会の人々が「喜びと真心をもって食事を共にした」とあります。食卓は単なる食事ではなく、心を開き、関係を結び直す場です。国籍も身分も性別も越えて、キリストにあって一つとされ、キリストのいのちと信仰の分かち合いの場であり、この食卓の交わりを通して神との和解、互いの和解が広がっていきました。

3. 愛に生きる

ヨハネ 13 章でイエスは、弟子たちとの最後の食卓の席で、弟子たちの足を洗い、「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」と命じられました。

この食卓には、イエス様を祭司長たちに銀貨 30 枚で裏切ろうとし、その機を伺っているイスカリオテのユダがいました。「あなたのためなら、いのちも捨てます。」と言いながら、イエス様を 3 度否定するペテロがいました。「主よ、どこへ行かれるのか、私たちには分かりません。どうしたら、その道を知ることができるでしょうか。」と聞き直るトマスがいました。イエス様の言葉に向き合わず、「主よ、私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」と求めたピリポもいました。

裏切り、恐れ、誤解、不信…イエス様を裏切ろうと、見離そうと、従わせようとする弟子たちに囲まれている孤独なイエス様。でもイエス様は最後まで彼らを愛されたとあります。**何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。(I ペテロ 4 : 8)**とあるように、愛は立場や過去を超える力であり、和解になくってはならないものです。

そして、恐れを超えて相手を「兄弟」「姉妹」と呼ぶ勇氣。アナニヤがサウロにそう呼びかけた時、和解の扉が開き、この食卓は和解の食卓となりました。

○私たちの課題

敗戦記念礼拝で、私たちは過去を思い起こすだけでなく、未来に向けて「どんな和解の食卓を広げていくか」を考えたいと思います。

家族の中でのわだかまり、職場や地域での対立、国と国との間にある不信感——キリストはその全てを越えて、私たちを招いています。

私たちの周りにも、まだ同じ食卓に座っていない人がいるかもしれません。避けている人、許せない人、関係が途切れてしまった人——。主はその人をも招き、あなたと同じ食卓に着かせようとしています。

敗戦記念日は、ただ過去を振り返る日ではなく、**和解を選び取る日**です。

主は今日も言われます。「行きなさい。彼はわたしの選びの器です。」
和解は、神の招きに応じて一歩踏み出すところから始まります。

○まとめ

80年前、韓国と日本は敵同士でした。

しかし、キリストの食卓は、国境も悲しい歴史も越えます。

なぜならキリストがいのちをかけて、神との間に、互いの間にあった隔ての壁、敵意を打ち壊してくださったからです。エペソ2：14-19

主は、サウロを変えられたように、私たちの心と関係、日韓の関係をも変えることができます。そして、その始まりは、キリストの食卓に座ることからです。

主は私たちをコイノニアという「和解の食卓」に招いてくださっています。

今回の日韓の中高生たちが笑い合う姿は、まさにそのしるしです。

この食卓は、礼拝から始まり、私たち一人一人から、家庭に、地域に、国と国との間にも広がっていきます。

ですから、今日ここから出ていく私たちも決意しましょう。「キリストの和解の食卓を広げていく」と。

祈ります。